

自彊前進

題字 西村直子

NO. 19 令和4年9月6日(火)
新潟大学附属新潟中学校 学校だより
文責 教頭
※ 自彊前進…自ら努め励み、前に進むこと
(校歌3番の文言から)

全校道徳より

誰の空間？

新型コロナウイルスの蔓延に伴って、私の仕事量は激増している。医療に携わっていることを粹に感じながらも、私はそれを上回る疲労感を感じている。

その日は本来休みであったが、人員が足りず職場に向かうことになりバスに乗った。

ちようど近所の学校の下校時間と重なり、多くの小学生、中学生が乗り込んできた。

「また附属中の生徒か・・・。」

私は経験的にどこかモヤモヤとし、落ち着かない気持ちになった。というのも、以前に同じバスに乗っていた際に、周囲のことなど考えずに大きな声でしゃべり続け、座席も占有し、非常に良くない態度をとっている同じ中学校の生徒がいたから。その時は一言注意を促したのだが、その後どうなったのか・・・。中学校の先生にも伝えたが、生徒に指導してくれたのだろうか・・・。今日乗ってきた中学生はその時の生徒とは違うと思うが、相手意識をもって行動できるのだろうか・・・。様々なことを心配し始めた。

乗車してきた中学生は仲間同士で大声で会話を始めた。不安をさらに上回るような姿に怒りを覚えた。コロナ禍、多くの一般客と静かに乗車している小学生の姿。対して、いつまでも周りに構わず話し続ける中学生がいた。その姿に常識の無さを感じた。

私は我慢ができませんにその中の一人に声をかけていた。「その行動は配慮がないんじゃないですか。」

その生徒は目を合わせず小さく「はい。」と発し、逃げるように離れていった。その様子からは、状況が良くなるという期待を抱くことはできなかった。

私は怒り、不安、責任、残り続けるモヤモヤから、いたたまれなくなり、生徒が通う中学校に電話をしていた。

上記は、実話であり、先日実際に地域の方からいただいたお電話を基に作成した、自作教材です。附中生の素晴らしい点をたくさん知っている附属中学校の教員にとって、このような電話をいただくのはとても残念でなりません。今回この電話に対応した教員も悔しさをにじませていました。

附属新潟中学校では、50周年の際、全校で何度も議論を重ね、制服の自由化に踏み切りました。また、遠方からの通学や公共の交通機関を使う生徒が多く、緊急事態にかかる連絡をとることもあるかもしれないということから、申請した生徒に限り携帯電話の持参を認めています。

このことが意味すること、それは、「自由」というよりはむしろ「自制」です。

公立中学校の生徒が、登下校時に買い食いをしたり、ゲームセンターに行ったりすることはほとんどありません。なぜなら、制服を着ているからです。制服を着ていることが、自制心を生みます。また、公立中学校の生徒は、携帯電話を持参することがありません。

それに対して、附属新潟中学校の生徒は、公私の境目がはっきりとしていない状況にあります。家にいるときと同じ服装、持ち物を身に付けているからこそ、常にTPOを踏まえた行動が求められます。つまり、公立中学校の生徒よりも自制しなければならない状況が多いのです。ここにも、当校に通学する意義があります。

地域の方々にとっては、たまたま見かけたあなたの言動が、附属新潟中学校に対するイメージを形作ります。緊急時にしか使用できない携帯を操作し、音楽を聴いたりしてはいないでしょうか？道いっぱいに広がって歩いていませんか？今一度、校内だけでなく、校外での自分の行動を振り返り、TPOに合わせた行動ができているか見つめ直しましょう。

先日、父母教師会の生徒育成委員会から配布された「ひまわり通信」に、下校時の街頭視察の報告が掲載されていました。良い姿もたくさん報告されていましたが、「バス車内でのマナー・携帯電話の使用についてもう一度考えてもらいたい」という厳しいご指摘がありました。今一度参照し、自らの行動を見つめ直してほしいと思います。